

Annual Report 2024

Lake Utonai Sanctuary



2024.4-2025.3
April 2024-March 2025

ウトナイ湖サンクチュアリの「伝える活動」

オンラインセミナーで発信！

ウトナイ湖サンクチュアリの魅力

6月15日、ウトナイ湖の魅力を紹介するオンラインセミナー「行ってみよう！ウトナイ湖サンクチュアリ」を開催し、全国に向けてライブ配信を行いました。最大で約290人という多くの方にご覧いただきました。

ウトナイ湖で見られる野鳥や植物をライブ映像とともに解説し、都市近郊にありながら豊かな自然が残るウトナイ湖の魅力や価値を広く発信しました。また、ウトナイ湖を含む勇払原野の生態系、ネイチャーセンターの取り組み、自然環境の保全にたずさわるレンジャーの仕事など、人と自然のつながりについても伝えました。

ウトナイ湖・夏の昆虫観察会を開催

8月5日の夜、ウトナイ湖周辺で昆虫観察会を開催しました。子ども5名とご家族が参加し、光に集まる虫の習性を利用したライトトラップの前で、昆虫の観察を楽しみました。ウトナイ湖には森林、草原、湿原といった多様な環境があり、さまざまな昆虫が生息しています。湿地に生えるハンノキを食草とするオナガミズアオや、朽木を好む甲虫の仲間など、1時間で約30種類の昆虫を確認することができ、子どもたちは図鑑を片手に夢中で昆虫を調べていました。また、「ウトナイ湖の自然のすばらしさや、初めて見る生きものとの出会いに親子ともども魅了された」との感想が寄せられました。



どんな虫が見られるかな？



羽がきれいなオナガミズアオ



白い布に集まる虫を1つずつ観察

マイクを通して野鳥のさえずりを紹介



可憐な草花をズームして見せる



展示に適した根つきの水草を探すのは大変



ふだん見ない水草に興味津々のサポーターの皆さん

ウトナイ湖内に生えている水草の展示について報告

ウトナイ湖内には、ヒシ、コウホネ、セキショウモなど、さまざまな水草が生育しています。これらは、渡り鳥にとって大切な食べもののひとつであり、多くのガンやカモの仲間がウトナイ湖に立ち寄る理由のひとつにもなっています。

そこで多くの方に、水中にあり観察のむずかしい水草に関心をもっていただこうと、ネイチャーセンター・サポーターの皆さんと協力し展示を作成しました。関係機関の許可を得たうえで、岸辺に打ち寄せられた水草の中から根のついたものを探し出し、水槽内の砂にいていないに植えつけました。暑い中での作業でしたが、参加した皆さんも、満足のいく仕上がりになったようです。

展示期間中は、水槽をのぞき込む来館者の姿が多く見られました。また、リピーターの方々には、ヒシが花を咲かせ、実をつけるようすを楽しんでもらうことができました。ウトナイ湖の水草が、渡り鳥の命を支える自然のつながりの一部であることを、多くの方に感じてもらえました。

巣箱づくりを通して学ぶ野鳥と森のつながり

9月23日、北海道旭川市の旭山動物園にて「作ってみよう！野鳥の巣箱～組み立てから設置まで～」を開催しました。このイベントは、野生動物保護を行う団体やその取り組みを紹介し、関連商品の販売も行う「あにまる・ハッピー・マーケット」の企画のひとつで、旭山動物園と同市内で木工クラフトを手がける(株)ササキ工芸の協力で実施しました。

レンジャーが巣箱づくりの講師をつとめ、野鳥の中には天然の樹洞の代わりに巣箱を利用して繁殖する種がいることや、大きな樹洞を必要とするシマフクロウと当会の保護活動についても紹介しました。その後、9組の参加者がグループごとに、桐材を使い巣箱を1個ずつ製作しました。その内2個を参加された皆さんと一緒に園内に設置し、残りは後日、動物園職員に設置していただきました。

樹洞を利用する野鳥の生態だけでなく、希少種保護活動の重要性についても理解を深めていただくことができました。



シマフクロウ保護活動についての紹介



巣箱の設置作業のようす



設置した巣箱

アイシン北海道株式会社のボランティア活動

ウトナイ湖の林は、かつて薪炭林として利用されていた経緯もあり、現在は根元から複数の細い幹がのびている木が多い二次林となっています。そのため、樹洞で子育てをする野鳥や哺乳類にとっては、繁殖には利用しづらい環境です。

そこで、こうした動物たちの繁殖を支援するため、9月20日にアイシン北海道株式会社の皆さまとともに巣箱作りを行いました。汗をぬぐいながら約2時間かけて巣箱を完成させ、観察路脇の樹上へ設置しました。

設置後は、野鳥の利用状況の確認や利用後の巣箱内清掃などの管理を続けていく予定です。



板材からノコギリで切り出す



巣箱の形に組みあがる



各地から集まった32名が活動



アイシンのロゴ入り巣箱



ガン類の生態について話す牛山氏



湖岸でガンやカモの仲間を探す参加者

秋

渡りの季節を感じて学ぶ一日～「秋の渡り鳥DAY」開催報告～

ガン類やハクチョウ類の渡りの時期にあたる10月20日、「秋の渡り鳥DAY」を開催しました。ウトナイ湖に飛来するマガンも立ち寄り、北海道美唄市の宮島沼水鳥・湿地センターの牛山克巳センター長をお招きし、午前はウトナイ湖野生鳥獣保護センターにて「ガン類の渡り」、午後はウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターにて、18歳以下を対象に「自然保護に関する仕事」をテーマにご講演いただきました。

ガン類の渡りルートを調べるための発信機の紹介や、調査時の写真など、ふだん接することのない貴重な話に、参加者は熱心に耳を傾けていました。

そのほか、ウトナイ湖野生鳥獣保護センターでは「はじめての水辺の渡り鳥観察会」も開催。館内ではマガンのカウント体験やガンカモ類に関する解説展示も行われ、秋に渡ってくる水鳥について楽しみながら学ぶ機会となりました。

勇払原野の保全活動

勇払原野における希少種の生息状況と保全の取り組み

空を舞うチュウヒ、湿原に響くタンチョウの声 ～勇払原野のいま～

勇払原野は石狩低地帯南部に広がる、湿地・草原・森林が混在する生物多様性の豊かな自然環境で、ウトナイ湖や弁天沼周辺にはいまでも多くの野生生物がくらしています。2024年度の調査は、弁天沼周辺と浜厚真地区で行い、4月から8月にかけて13日間、車中から飛翔軌跡や行動を記録しました。

その結果、絶滅の恐れがあるチュウヒのつがいを7組確認し、その中の3組から6羽の幼鳥が確認できました。昨年と比べると繁殖成功のつがい数は同程度でしたが、繁殖に利用する区域内では再生

可能エネルギー事業や工場建設等の開発が進んでおり、今後の影響が危惧されます。

勇払原野では全体で10つがい程度が生息していると推定されており、サロベツ原野につぐチュウヒの重要な繁殖地です。近年ではタンチョウの飛来・繁殖も確認されていて、絶滅危惧種の生息地である勇払原野の保全の重要性が高まっています。当会では、市民・企業・行政と連携しながら、生息環境の保全と湿地の再生に取り組み、希少種が安心してくらす自然の保全を進めていきます。



勇払原野は新千歳空港の南側に広がる低地帯



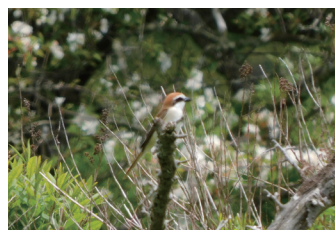
草原の上を飛ぶチュウヒ



草原は切り開かれ発電所に



原野化した場所は生きものの楽園



希少種のアカモズも繁殖する

多くの生きものの命を支える美々川

ウトナイ湖に流れ込む美々川は、年間を通して豊富な水をたたえ、湖の自然環境を支える大切な川です。その源流は、新千歳空港東側にある丘陵部に始まり、複数の支流と交わりながらヨシを中心とした湿原の中を流れ、最終的にウトナイ湖へと注ぎます。この流域では、一部を除き河川改修が行われていないため、蛇行した原始的な姿がいまも残され、多様な生きものたちがくらし、絶滅危惧種を含む豊かな生態系が保たれています。

また、上流の千歳市駒里地区や下流の苫小牧市植苗地区では、漁業やカヌーなどの地域利用も行われており、美々川は地域にくらす方々にとっても身近で大切な川です。

しかし近年、源流部では半導体工場や関連施設の建設が進行し、中・下流域でも河畔林の伐採や湿原部への太陽光発電施設の建設等の開発行為も見られ、自然環境への影響が懸念されています。特にこの地域は火山灰に覆われ、透水性の高い地質のため、地下水への影響も無視できません。その変化を把握するためにも、2024年度には、ネイチャーセンター・サポーターの皆さんとカヌーで美々川本流のヨシ原のようすや、どのような生きものがいるかを記録しました。工業が盛んなこの地域に残された豊かな自然を未来に残すため、私たちは地域の方々とともに、美々川の保全活動に取り組んでいます。



とうとうと流れる美々川下流部



森を抜ける美々川上流部

苫東厚真風力発電計画に対する取り組み

日本野鳥の会は、(仮称)苫東厚真風力発電事業に関連する環境影響評価準備書に対して、9月に意見書を事業者へ提出しました。勇払原野はチュウヒやタンチョウなど絶滅の恐れのある野鳥の重要な繁殖地です。風車建設がこれらの種の生息環境に与える影響が懸念されること

から、当会では地域の自然保護団体や研究者と連携して、計画当初から現地調査や情報共有を重ねていました。今回提出した意見書は、多くの関係者の調査や観察結果をもとに衝突リスクや生息地の喪失について検討し、科学的見地から事業計画に対して自然環境への配慮を強く求

める意見として提出したものです。今後もこの風車建設計画による生態系への影響を最小限におさえるため、地域の皆さんとも協力し、地域全体での取り組みを進めていきます。



風力発電の計画地



当会の理事長による視察



地域の自然保護団体の方々とともに風力発電の計画地を視察し、意見交換を行った



多くの方に来ていただくために

ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターでは、来館者がウトナイ湖の自然や当会の希少種保護活動を楽しみながら学べる展示を提供しています。来館者に理解してもらえるよう、展示内容を工夫し、よりわかりやすく伝えることを心がけています。2024年度は、樹洞性の動物と巣箱の紹介や、雪上の動物の足あとを紹介するコーナーなどを作成。ネイチャーセンター周辺の季節ごとの自然の変化や注目すべき生きものに関する展示で、子どもから大人までが自然の魅力を学ぶことができる場を作りました。また、絶滅危惧種であるチュウヒやシマフクロウの保護活動を重点的に紹介し、その重要性を実感していただける内容にしました。ウトナイ湖の自然の基礎知識から保護活動の詳細まで、館内展示を通して幅広く伝えていきますので、ぜひネイチャーセンターまで見に来てください。

展示物で紹介する ウトナイ湖の魅力と希少種保護活動



子どもが楽しめる絵本コーナーをリニューアル



自分の位置がわかる
観察路WEBマップを掲示



展示用のエゾフクロウ巣箱を作る

数字で見る2024 年度

ネイチャーセンターの実績

利用状況

利用者（来館者）数 （団体、ボランティア、 イベント行事を含む） サポーターや関係者を除く	8,030人 （うち開館日数 102 日の個人来館者数 7,459 人）
団体対応 （ボランティアを含む）	22件 477人
	団体一般来館者（無料対応） 2件 22人
	団体有料プログラム対応 10件 329人
	ボランティア対応 10件 126人
保護保全	
鳥インフルエンザ 対策の監視巡回	40回 勇払原野鳥類調査 および巡回 20回
タンチョウ動向調査	2回 日別出現鳥類記録調査 310回
開発問題対応	7回 観察資源調査 （自然情報マップ発行） 12回
ワシ類カウント調査	1回 環境管理 9回 （のべ107人）
普及教育	
観察会等	4件 88人
ボランティア活動	10件 のべ26人
サポーター活動	42件 ※登録者数 34人（3月末現在）
講演・イベント等	18回（サンク内でのイベント参加人数94名）
支援等	
ウトナイ湖ファンクラブ	個人 75人 法人 4団体 （3月末現在）
ファンクラブ通信発行	243回
その他	
委員会	4回
取材対応	12件

ウトナイ湖野生鳥獣保護センターの実績

自然観察・指導業務	展示教材・作成業務
来館者数	56,324人
団体来館者への対応	18団体 533人
自然観察会の実施	3回 99人
渡り鳥 フェスティバル	2回 156人
ショート プログラムの実施	14回 ※残り1回は展示物の作成
ボランティア・育成業務	ウトナイ湖周辺 鳥類調査 1コース5回
講座・研修会の 実施	6回 48人
ボランティア コーディネート	49回
	広報情報発信
	通信紙の作成 （ウトナイ湖通信） 12回
	SNS への 情報提供 84回

来館者数が大幅に増加

地域からも 観光客からも親しまれる ネイチャーセンターに

ネイチャーセンターの2024年度の個人団体を含む総来館者数は、2023年度よりも約1,600人多い8,030人でした（図2）。開館日1日あたりの個人来館者数をコロナ禍前の2018年以降のデータと比較すると、今年度は特に冬に来館者が増える傾向が見られました（図1）。

来館者の地域別の推移をみると、道内・道外からの来館がともに増加しており、苫小牧市・札幌市からの来館者は約3割増、その他の道内・道外からも2割増と、近隣だけでなく遠方から訪れる方も増えています。一方、海外からの来館者数は前年とほぼ横ばいでした（図4）。

インバウンド観光が活発な北海道において、苫小牧市や札幌市といった都市部から「身近な自然を楽しみたい」という目的で、近隣在住の方々がウトナイ湖を訪れる方が増えているのは、地域の自然の大切さを伝えるうえでも好ましい傾向です。

図1 開館日1日あたりの一般来館者数

（コロナ禍前の2018年度と、2022年度以降）

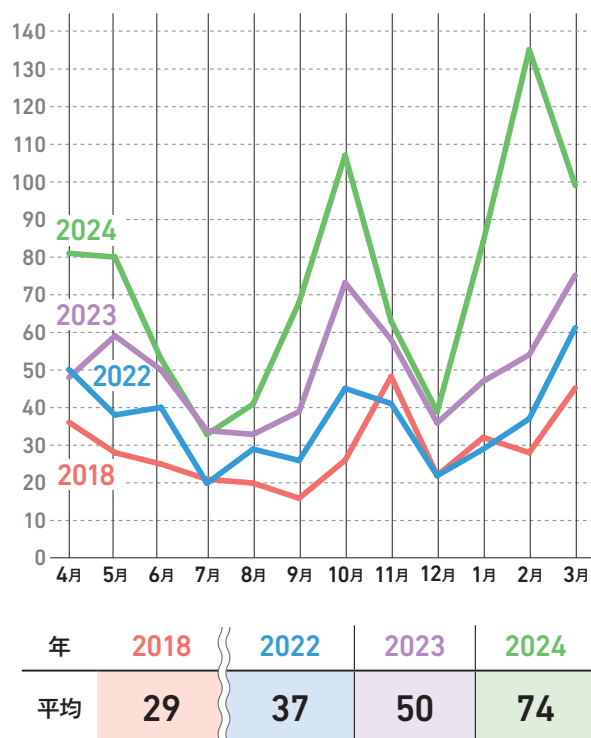


図2 利用者総数・個人一般来館者数の推移

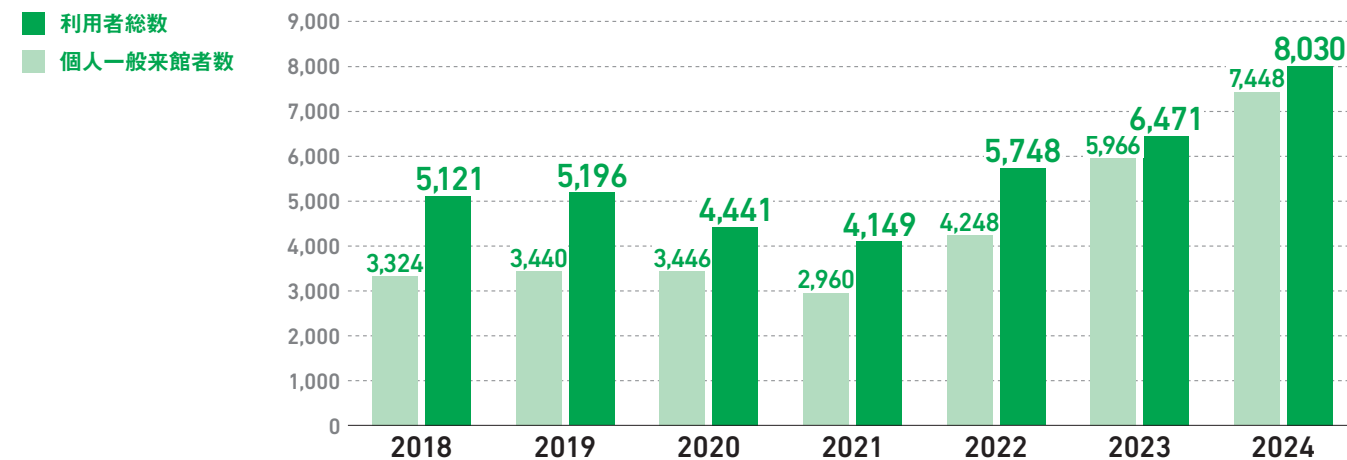


図3 地域別一般来館者の割合

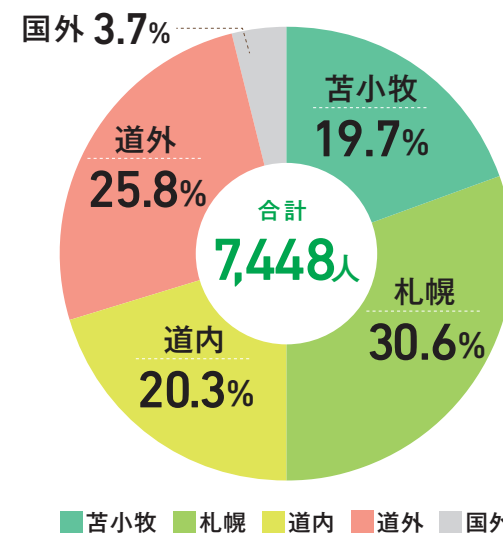
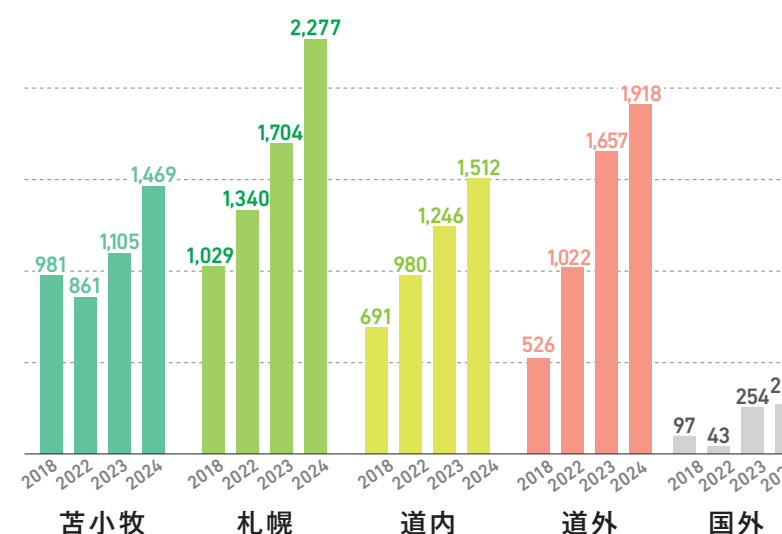


図4 地域別個人来館者数の推移



売上が 自然保護活動の力に 館内ショップのご紹介

ネイチャーセンター館内では、当会オリジナルの長靴、寄付つき「千人の森」Tシャツ、しおりのほか、図鑑『新・山野の鳥』『新・水辺の鳥』でおなじみのイラストレーター谷口高司氏の関連商品など、さまざまなグッズを販売しています。

2024年度も多くの方にお買い求めいただき、その収益を自然保護活動に役立てることができました。今後も魅力ある商品の展開を予定しておりますので、ご来館の際にはぜひショップもご覧ください。



シマフクロウを守る
「千人の森」Tシャツ

しおりやブローチなどの雑貨が並ぶ



おすすめの図鑑も手に取って
ご覧いただけます



谷口氏のイラスト関連グッズも
取りそろえています

皆さまに支えられて

「サポーター」と一緒に ウトナイ湖を守る

ウトナイ湖を含む勇払原野の自然環境を守るため、私たちは生きものの調査やネイチャーセンターを訪れた方との対話のほかに、さまざまなイベントの開催を通じて、自然環境保全の重要性を伝えています。

こうした幅広い活動を支え、拠点となる施設の維持管理や観察路の整備などを担っているのが、「ネイチャーセンター・サポーター」の皆さんです。ウトナイ湖サクチュアリが設立された1981年から今日まで、長年支えてくださっている方から新たな方まで、総勢34名の皆さんが活動しています。

小・中・高校生も
活躍中



カウント調査を
するサポーター

ウトナイ湖ファンクラブ

「ウトナイ湖ファンクラブ」は、当会のウトナイ湖や勇払原野の自然環境を末永く守るための活動を支えていただくために設立した賛助会です。現在、法人4団体、個人75名の方が会員となっています。皆さまの会費は、鳥類調査にかかる費用や、自然の現状と自然を守る活動について伝えるための展示物の作成費、そして観察路やネイチャーセンターを多くの方に利用していただくための整備費などへあてさせていただきます。



定期的に行う自然観察路の整備



自然観察路の巡回も欠かせない

ウトナイ湖サクチュアリについて

日本野鳥の会は1970年代後半に、自然保護や環境教育の拠点となる「サクチュアリ」をつくろうという運動を開始しました。この運動により1981年には、全国から寄せられた約1億円の募金をもとにして、北海道苫小牧市のウトナイ湖に国内第1号のサクチュアリ「ウトナイ湖サクチュアリ」を開設しました。そして、湖畔には「ネイチャーセンター」を開館し、専属職員「レンジャー」を配置して市民をはじめ多くの方に自然体験や学びの場を提供しています。

サクチュアリの開設から40年以上が経過し、その間にラムサール条約湿地への登録や千歳川放水路計画の中止など、大きな成果を残すことができました。近年では2000年から2006年にかけて策定した「ウトナイ湖勇払原野保全プロジェクト」の保全構想に基づき、絶滅のおそれがあるチュウヒやタンチョウ、オオジシギなどが生息する、野鳥の重要生息地(IBA)であるウトナイ湖と、その一帯を有する勇払原野の豊かな自然環境保全にも取り組んでいます。

公益財団法人 日本野鳥の会

ウトナイ湖サクチュアリ ネイチャーセンター

[開館] 土日祝日 9:30~16:30 ※平日は休館

〒059-1365 北海道苫小牧市植苗150-3

TEL 0144-58-2505 FAX 0144-58-2521

E-mail utonai@wbsj.org (調査等で不在のこともあります)

詳しくは

URL <https://utonai-nc.sakura.ne.jp/>

Facebook、Instagram、X(旧 Twitter)でも情報発信中

日本野鳥の会 ウトナイ湖サクチュアリ 2024年度活動報告 発行 2025年7月



最新情報は
こちらを
ご覧ください

